

東南アジア学会第104回研究大会

アンソニー・リード著『世界史のなかの東南アジア』日本語版刊行記念シンポジウム  
「全体史を通じた総合と対話の試み——新しい通史と翻訳の問題をめぐって」

日時：2022年12月11日（日）9：00～16：00

会場：東京外国語大学アゴラグローバル

**【プログラム】**

9：00～12：00

**第一部 書評フォーラム「アンソニー・リード著『世界史のなかの東南アジア』を読む」**

司会	蓮田隆志
趣旨説明	長田紀之
書評	飯島明子，桃木至朗，岸本美緒，杉原薫
訳者からの応答	太田淳
総合討論	

13：30～16：00

**第二部 ラウンドテーブル「東南アジア研究における翻訳の問題」**

司会・趣旨説明	今村真央
討論者	清水展，菅原由美，Nathan Badenoch，福富渉，勝康裕

**【趣旨】**

本シンポジウムは、昨年に翻訳出版されたアンソニー・リード著『世界史のなかの東南アジア』（上下巻，名古屋大学出版会，2021年）を手がかりに，東南アジアとは何か（地域としての括りが可能であるならばその特質は何か），多様性に満ちた地域の通史をどのように総合的に描くか，地域研究において翻訳はいかなる意義をもつのか，といった諸問題について対話・議論する場を学会の内外に開くことを目的とする。

第一部は，リード通史の内容について議論する。同書はこれまでの東南アジア史研究の集大成とも呼べる包括性を帯びる一方で，従来の諸議論をリード氏が咀嚼したうえで構築した独自の論法でもって書かれているという点で独創的かつ画期的な作品である。そして，本書の議論の根底には，他の地域から区別しうる独特の地域としての東南アジアが存在するという確信が横たわっている。リード氏によれば，東南アジアは世界にも類をみないほどの多様性を抱えながら，内部を貫く共通性ゆえにひとつの全体として捉えられる。そうした共通性は，熱帯の水域に位置するという自然環境，女性の経済的役割の大きさ，多くの人々が自律的に生きてきたという非国家性，そしてなによ

りも、多様性の内実がつねに更新されつつも一定範囲の包摂と総合が絶えず生み出されもするという、交差点のあり方に見いだされた。リード氏の描く東南アジアは、域内の火山噴火が地球全体の気候に影響したこと、特産の香辛料が世界史上の近世=初期近代が始まるきっかけとなったことなど、過去の世界史に決定的な影響を与えてきた。そして現代においても、国家に過度に依存しない生き方やジェンダー間のバランス、多様性の維持という点で批判的な価値をもつ存在である。このように地域の存在を前提として、それをクリティカルなものとして主張するリード通史の内容を踏まえ、東南アジアおよび隣接地域の歴史研究に長く携わってこられた登壇者の方々による同書の書評と、フロアも含めた総合討論を通じて、学会内外でのさらなる議論を喚起したい。

第二部は、東南アジア研究における翻訳というテーマを取り上げ、ふたつの位相を論じる。第一に、東南アジアにおける翻訳という位相である。数えきれないほど多くの言語が飛び交うこの地域において、人々は内外の多様な言葉をどのように訳してきたのだろうか。また外来の文化や宗教をどのように翻訳し、現地化してきたのだろうか。リード氏は <sup>ハイブリディティ</sup> 混 淆、<sup>シンセシス</sup> 総合/習合、<sup>ヴァナキュラリゼーション</sup> 民俗語化といった概念を用いて、多様性と共通性が繰り返し生成される様子を描いたが、これらの動態や営為を「翻訳」という枠組みから捉え直すことによって、東南アジアとは何かという議論に新たな視点を提供したい。第二に、学術研究における翻訳という位相である。この地域を調査対象とする我々研究者も日常的にさまざまな翻訳に依存し、従事している。英語のヘゲモニーが取り沙汰される今日、東南アジア諸語の文献や英文学術書を日本語に翻訳することは、学術研究ひいては社会一般にとってどのような意義をもちうるのだろうか。また、学術書や文芸作品の翻訳にはそれぞれどのような技芸が求められるのかなど、実践的な知恵も共有したい。翻訳・出版の過程は、訳者と原著者との間の、あるいは共訳の場合は訳者間での、そして出版社・編集者との密なコミュニケーションをとれないながら、複数人での共同作業として進めてられていく場合も多い。こうした共同作業を円滑に進めるためにも、やはり総合と対話は必要になるだろう。